

## 息子による介護と退院支援に関する研究

村田悦子<sup>1)</sup>, 原等子<sup>2)</sup>

1)新潟労災病院 2)新潟県立看護大学

**Key Words** : 息子, 要介護高齢者, 在宅介護, 介護サービス

### はじめに

高齢な入院患者の退院支援の際に考慮すべき点として、家族の介護力がある。介護力によっては、患者・家族の意向を最優先に尊重した上でも、退院後の療養場所の希望に添えないことがある。退院支援の際に患者・家族に選択肢として突きつけられる自宅退院か施設入所かの選択は、患者と家族の意向の相違を生じることも多い。特に主介護者が就労男性の場合、また独身の息子の場合、患者と息子の支援者が希薄な場合は、介護力が十分であるといえないことが多い。

国民生活基礎調査(大臣官房統計情報部, 2014)によると、ほぼ介護を終日必要とする高齢者のうち、主に息子から介護を受けている人の割合は、11.4%である。全体の割合としては少ないように感じるが、『迫りくる「息子介護」の時代』(平山, 2014)によると、息子による介護が1977年の時点では2.4%で30年強の間に6倍弱にまで増えていると指摘している。少子化・晩婚化・非婚化の傾向を理由の一つとして挙げている。現在、病院で出会う主介護者は同居の配偶者や嫁が多数であるが、今後息子が増加してくることが考えられる。

家族介護者の変化に伴った、男性介護者の介護実態を調査し、支援の課題を指摘した斉藤(2011)の調査報告や、織田ら(2012)による妻と息子の介護に関する認識を調査した研究から介護に対する男性の特徴は明らかにされている。しかし、今後増加することが予測される、急性期病院から自宅へ退院する患者と主介護者である息子に対する退院支援に関連したニーズは明らかにされていない。そこで、本研究は主介護者である息子へ自宅退院後に電話調査することにより、退院支援ニーズを明らかにすることを目的とした。

### 研究目的

自宅退院した要介護高齢者の息子が主介護者である場合の退院支援ニーズを明らかにする。

### 研究方法

#### 1. 研究対象者

A 病院(急性期病院)で整形外科疾患により入院加療し自宅退院する予定の、要介護高齢者の主介護者である息子2人。同居の如何を問わないこととした。

#### 2. 研究デザイン 質的記述的研究デザイン

#### 3. データ収集方法

親が入院中に研究主旨の説明を行い協力が得られたのち、介護状態を把握するための調査を退院前および退院後10~14日後に実施した。対象者および要介護高齢者の基本属性、介護の状況などを半構成的に退院前は面接、退院後は対象者の生活状況を考慮し電話調査した。

#### 4. 分析方法

調査内容は質的に分析し、研究者相互に分析内容について合意が得られるまで吟味を重ねた。分析の妥当性に関しては、質的研究の経験がある研究者にスーパーバイズを受け進めた。

## 5. 倫理的配慮

研究協力者には、研究目的と方法を研究者が文書と口頭で説明し、質問紙調査と電話でのインタビュー、およびインタビュー内容の録音許可の同意を得た。研究協力は自由意志によるものであり、いつでも希望すれば研究への協力を中断できること、研究への協力の有無により治療や看護ケアにおいて不利益をうけることはないことを保障した。本研究の実施に際しては、所属病院の倫理委員会の許可を得て実施した。

**結果：**2事例に対して調査を行った

### 1. 事例紹介

#### 1) 事例 1

##### (1) 事例 1 の概要

40歳代前半、会社員。休日出勤がある。要介護2の70歳代前半の父親と2人暮らし。父親は脊椎骨折で入院し安静療養後、コルセットを装着し1本杖歩行を行っている。入院前からデイサービスとヘルパーを利用しており、介護協力者はいない。

##### (2) 事例 1 の退院 2 週間後の状況

入院中の父親の年齢を考慮した治療に対して納得しており、主治医や病院に対して要望はなく「安静にさせていただいて、ありがたかったです」と感謝の言葉が聞かれた。また、退院後の父親の様子が変わったことを聞くと、「日々回復しているってことです」と語り、父親が入院前の状態に回復していることを、自宅介護をする中で感じる事が出来ていた。介護サービスは、退院後の様子を見ながら利用回数を検討する予定だったが、変更なくデイサービスを週に3回、ヘルパーを週2回利用している。入院前から家事全般を行っているが、夕食は宅配サービスを利用し、父親の洗濯はヘルパーに依頼しており退院後も変わらない状況だった。しかし、ヘルパーに関しては「当たりはずれっていうのもありますけどね」や「これは出来ませんっていうこともありますし」など、満足していない言葉があった。だが、「うちのおやじ、その人でないと面倒みてもらえず嫌だという話で来てもらっています」と、利用継続の理由を話していた。

#### 2) 事例 2

##### (1) 事例 2 の概要

60歳代前半会社員。休日出勤がある。要介護高齢者の80歳代後半の母親と妻、息子の4人暮らし。妻と息子ともに就労している。今回、母親は右上腕骨骨折で入院し、手術後リハビリを行い退院した。入院前は要介護1だったが、今回退院後は要介護2に変更予定である。入院前からデイサービスと福祉用具のレンタルを利用していたが、退院後にはポータブルトイレとデイサービス用の歩行器を追加していた。同居家族に介護相談や協力を求めることは可能である。

##### (2) 事例 2 の退院 2 週間後の状況

退院後の母親の様子で気になることを聞くと、「私たちが見ていると手を貸して欲しがりますが、陰で見ていると、ひとりで動いているのがたまに見られるので、少しずつは良くなっているのかなっていうのがわかるんです」と、回復している様子を実感されている。しかし、体調はその日によって変化があり、「ベッドから起き上がるのが、やっとで」という時や、「危ないからポータブルですれって言っているんですが」、「トイレまで行ったりしているんで、逆に心配で」と、回復を喜びながら転倒の危険を心配している様子が伺えた。退院前の不安

を聞いた時には、「自宅で過ごしていないので、イメージができない」と話していた。自宅はバリアフリーではなく段差があり、歩行器は使用できない環境である。しかし、「家がそのままの状態だったので、かえってそれが良かったみたいで」、「自分の居場所がわかるみたいで、落ち着いた感じでした」と、母親の自宅に戻れた喜びを感じ取られていた。母親以外同居家族はみな就労者であり、家事全般の担当は妻であった。妻が忙しいときに食事の支度を手伝える程度の協力を対象者はしていた。母親の退院後、対象者は着替えやトイレ誘導などの介護を主として担当し、妻は洗濯や対象者不在時の昼食支援を担当している。介護相談は、妻に行うこともあるが「ケアマネさんの方が、手っ取り早いんで、よくわかっているんで」と、主にケアマネジャーに相談している。「ケアマネさんも週1回とか来てくれているし」、「週1回もってことはないんでしょうけども」と、ケアマネジャーを信頼している言葉が聞かれた。病院への要望はなく、「現状維持になっているんで、このまま進まなければいいな」と現在の状況ならば在宅介護を継続できると感じていた。

### 考察

今回の2事例とも、退院後の要介護高齢者の体調は日々回復しており、息子は自宅で介護をしながら喜びを見出すことができていた。病院に対して要望や不満な点が聞かれなかったのは、急性期病院として治療という役割が出来ていたからではないかと考える。病院は治療の場であり、在宅や施設は介護というとらえ方から、要介護1~2のレベルの要介護者の息子は病院もしくは看護師に対して、介護に関しての直接的な退院指導を求めているかもしれない。事例1では、ヘルパーに対して本当はしてもらいたい支援があるにもかかわらず、解決方法を見つけることが出来ていなかった。ケアマネジャーとはサービス提供の相談程度で、親密な関係性を感じていなかった。一方、事例2ではケアマネジャーが退院後にこまめに訪問し、同居家族の相談にのることで、素早い対応が出来ているケースがあることがわかった。病院看護師は、息子が自宅で介護するための退院後の介護サービスがよりよく提供されるよう、ケアマネジャーと連携していく必要があることが示唆された。

また、今回の事例はともに夜間交代勤務はないが休日勤務をしている息子であった。事例1では、退院前の調査時にヘルパー不在時の日中の見守りを不安として挙げ、退院後のヘルパーには、「掃除と洗濯の他に話し相手を頼んでいる」と語っていた。また、事例2ではデイサービスの利用を週2回から退院後は4回に増やしたということだった。息子が在宅で介護する上で介護サービスは、要介護者が一人で過ごす時間の不安を補うものであり、自分にかわって親を見守ってくれる存在なのではないかと考える。

さらに2事例とも、家族不在時の転倒に関しての不安はあったが、退院後2週間の時点では在宅介護を継続することに「現状維持なら見ていけます」と受け入れている様子だった。松下(2014)は「看護や介護の目的は、ケアを必要とする人が可能な限りセルフケアを実践できるように援助することである」と述べている。さらに、「目指すのは対象の自立であり、看護する人も介護する人も、ケアという行為を通じて自らの専門性を高めるとともに、人とのかわりなから、人と実際にかかわらなければ学べないことを習得し、さらなる自立を達成していく」とある。要介護高齢者である親が自分でできるところは自分で担いたいと志向し、努力する姿を目にすることで介護する満足感が得られ、在宅介護を前向きにとらえられるのではないかと考える。

以上のことから自宅退院した要介護高齢者の息子が主介護者である場合の退院支援ニーズ

として喫緊のニーズは語られなかったが、介護サービスは息子が在宅で介護を継続していくためには重要なものであり、退院後の介護サービスを個別の状況に応じて調整する必要性がわかった。また、要介護者が自立に向けて努力していることを家族だけではなく医療として病院看護師も強力に支援していることを伝えることは、息子にとって介護の励みになるのではないかと考える。

今回、2 事例と事例数が少ないため、一般化するには事例の蓄積が必要である。今回は要介護 1～2 の親を在宅で介護する息子であり、退院後も順調に回復していった事例であったが、在宅介護の限界を明らかにできていないことや、介護度が高くなった場合に必要となる退院支援を明らかにしていないため、今後の課題としたい。

### 結論

1. 息子による在宅介護は、単身者か同居家族がいるかにかかわらず、困難があることが示唆された。しかし困難があったとしても、介護サービスが要介護者との生活の安心につながっていることが示唆された。
2. 要介護高齢者が自立に向けた努力をしていることが実感できることが息子の在宅介護の継続に力となる。そのため病院看護師は、入院中から要介護者の自立に向けた努力や思いを支援し、その様子を家族に伝えることで、退院時に自立が完結しなくても継続して努力できるよう支援していくことが必要である。
3. 退院前から病院看護師はケアマネジャーと連携を取り合い、個別の状態に合わせた介護サービスを調整していくことが必要である。

### 謝辞

ご多忙の中、快く調査にご協力いただきました研究対象者の方々に、この場をお借りして感謝申し上げます。

### 引用文献

- 織田幸子 舟瀬裕梨 増田綾乃(2012): 家族員間(妻と息子)における介護に関する認識の相違, 第 42 回日本看護学会論文集, 地域看護, 171-173.
- 斉藤真緒(2011): 男性介護者の介護実態と支援の課題, 立命館産業社会論集, 47(3), 111-126.
- 大臣官房統計情報部人口動態・保険社会統計課世帯統計室(2014): 平成 25 年国民生活基礎調査の概況, <http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa10/4-3.html> (2015.1.22)
- 平山亮(2014): 迫りくる「息子介護」の時代(初版), 光文社, 東京都, 33-34.
- 松下年子(2014): 家族介護と共依存, 日本認知症ケア学会誌, 13(3), 561-562.